

特集 迷走を続ける中国

波部

昨年六月四日に起こった中国の「天安門事件」は、世界に大きな衝撃と波紋を投げかけましたが、その後の状況や今後の展望、そして北朝鮮の動向などについてお話を伺いたいと思います。

まず中国ですが、国共内戦のあと、一九四九年に中国共産党を中心に中華人民共和国を成立させ、文化大革命などを経て、当時は走資派と呼ばれた

1989年12月、マルタ島における米ソ首脳会談を機に、国際政治の新しい流れが確立されたかに見えましたが、今回のイラク軍によるクウェート侵略で、一挙に闇の中に入ってしまった感じです。文化大革命や天安門事件の尾を引く中国、ミャンマーでの韓国要人爆殺事件や大韓航空機爆破事件など、テロ行為の不安が後を断たない北朝鮮。今ひとつ中がよく見えないこの両国の現状と将来について、この分野における国際政治の権威、中嶋嶺雄東京外国語大学教授にいろいろと伺ってみました。



中嶋教授(左)に中国、北朝鮮情勢を聞く波部事務局長

鄧小平等がリーダーシップをとり、社会主義国でありながら、いわゆる自由主義経済の手法を取り入れて万元戸や経済特区などを作ってきました。しかし、天安門事件で一挙に方向転換をし、時計の針が逆戻りしたようなことになりました。この事件の持つ意味を一年後の今、振り返ってみるとどういうことになりましたでしょうか。

北朝鮮の行方は…



東京外国語大学教授・海外事情研究所所長

中嶋嶺雄氏に聞く

●聞き手

波部忠司

明正会中央協議会事務局長

1936年、松本市に生まれる。1960年、東京外国語大学中国科卒。1965年、東京大学大学院国際関係論課程卒。東京大学・社会学博士。専攻は国際関係論・現代中国学・アジア地域研究。現在、東京外国語大学教授兼同大学海外事情研究所所長。文部省科学研究費重点領域研究「東アジア比較研究」代表、「アジア・オープン・フォーラム」日本側世話人などをつとめるほか、外務省特別研究員(在香港)、オーストラリア国立大学、パリ政治学院客員教授などを歴任。著書は、『北京烈烈』(筑摩書房)、『現代中国論』(青木書店)、『中ソ対立と現代』(中央公論社)、『香港・移りゆく都市国家』(時事通信社)、『中国に呪縛される日本』(文芸春秋)、『中ソの戦略・日本の選択』(PHP研究所)、『中国の悲劇』(講談社)、『中国革命とは何であったのか』(筑摩書房)など多数。

社会主義圏に衝撃を与えた天安門事件の波紋

中嶋 われわれは、歴史というものを瞬間、瞬間で目撃し、その場で区切って、物事を考えようとするんですね。しかし、歴史とか国際政治の動きといったものは、もっと長いパースペクティブ（遠近法）で位置付けて見ていく必要があるんだなということを感じさせられます。

特に、第二次大戦後の中国の動きは、このことをよく示していると思います。毛沢東の中国革命が成功して、内戦に敗れた国民党が台湾に逃れていき、これで中国は一つになった、古い歴史から決別して新しい中国社会を生み出すことになったと、新生中国に大きな期待が寄せられました。こういうプロセスが五〇年代の半ばぐらいまで続いたと見ていいと思うんですね。

波部 たしかに、五〇年代までの中国は、世界が目し、脚光を浴びましたね。

中嶋 そうです。もしここで歴史を区切っていれば、「中国というのは、何と素晴らしき国をつくろうとしているのか」ということになったでしょう。

一方、台湾に逃れた国民党政権は歴史から抹殺され、これはもういわば存在しないも同然の国ということになりました。

ところが、現時点で歴史を見てみますと、経済規模からいうと中華民国台湾が大陸中国に比べて、一人当たりのGNPで約三〇倍近い格差が出ています。台湾の一人当たりの国民所得は八千ドルになり、ここの二、三年のうちに一万ドルの壁を越えるのでは、と予測されています。比較経済指標をみてみますと、六〇年代までは台湾も韓国も、そして大陸中国もほぼ一人当たりのGNPは同じだったんです。

波部 としますと、それ以後の三〇年間に中国では、一体何が起こったのでしょうか。

中嶋 ちょうど中国が大躍進政策に入った一九五八年あたりから、人民公社、毛沢東主義などが台頭したわけでした、これが国づくりにあたって取り返しのつかない失敗を積み重ねてしまった。この間、世界は二度と経験することのな

いような成長期を迎えるのですが、それにキャッチアップすることなく、逆にマイナス（負）の遺産をたくさんつくってしまったということでしょう。ところで、去年の五月中旬にソ連のゴルバチョフが中国を訪問し、民主化がいよいよ進展するのかなと思った直後の天安門事件でした。わが国や東欧をはじめ諸外国に与えた影響は大きかったでしょうね。

中嶋 天安門事件がわが国に与えた衝撃も確かに大きかったとは思いますが、社会主義圏に与えた影響は日本以上に大きく、深刻でした。

私自身、天安門事件後、『中国の悲劇』（講談社）という本を書き、その直後に東欧に行きまして、東ドイツのベルリンの壁の近くにあるフンボルト大学で中国問題のセミナーをやったのですが、そのときの感じでも、東欧の知識人は、今や東ドイツはひよっとすると大きな変化を迎えるかもしれない。そしてそのときに、ホーネッカー独裁体制は天安門事件と同じようなことをやりはしないかという、一種の恐怖があったと思うのです。天安門事件は他人事ではない、と。

つまり、東欧の社会主義が崩れても仕方がない、それぞれの国の市民の側に任せざるを得ないとい

う大きな流れを作っていたのは、天安門事件の悲劇が逆になせるわざだったと思うんです。あの中国の悲劇があったがゆえに、東欧は救われた。そして、その事態の深刻な意味が全く分からなかったのがルーマニアのチャウシェスクであって、そのためにあのような惨めな結末を迎えることになりました。

波部 東欧のそうした動きが、今度は中国に逆輸入して、民主化運動に対して非常な警戒をしていると聞きますが……。

中嶋 鄧小平を中心とした中国指導者にとってひよっとしたら退場する番になる、あるいはルーマニアのチャウシェスクのようなことになりかねないという恐れがあるからこそ、徹底的な力による政治をやっていく。まさに恐怖政治を敷いているのが現状でしょう。

波部 市民どうしの密告や官憲による摘発が進み、自殺者も出ているようですね。

中嶋 そもそも中国は権力を確立した後、大衆路線といわれる一見民主的な政治指導方式の下で、毛沢東時代には一種の密告制度が当然の前提とされていたのです。



1989年6月4日の深夜、天安門広場で起こった「血の日曜日」の惨劇の一コマ。その後も、「八老治国」と呼ばれ、革命第一世代が権力の中枢を握り、現状を維持しようとしている。



ところが、非毛沢東化が行われ始めた一九七八年以降は、改革と開放の政策が押し出される中で、かつてのような密告制度は消滅していったと思われるのですが、今回の事態によって一挙に、中国共産党お得意の政治指導方式である「密告」が復活し、公然と奨励されることになってしまった。それから、自殺者の問題ですが、私の理解するところでは、中国人はあまり自殺はしません。自殺というものに美意識を感じて、一つの自己完結だというような日本人的な体質はありません。で

解体の危機はらむ中華人民共和国の内政

波部

天安門事件後の民主化運動は、その後どのようなことになっていまいしょうか。

中嶋

今、中国当局は徹底的な締め付けをやっていますので、再びワツと民主化運動がシナリオどおりに進捗していくとは考えられません。

昨年の十一月下旬と今年の四月下旬から五月上旬にかけての二回、事件後の中国へ行ったのですが、至るところに人民武装警察部隊がいましたね。五四運動記念日の夕方、たまたま天安門広場に

あるのに、私の得ている情報でもあちこちの大学で、かなりの自殺者が出ているんですね。

そしてこれは、官憲の抑圧によって自殺するというよりも、仲間同士の密告や裏切りが原因のようです。民主化運動の過程で一緒に手を携えた仲間が、権力の締め付けのなかで密告したり寝返ったりする。運動の後の、人間同士のさまざまな亀裂が彼らを自殺に追いやっているわけですね。そういう意味でも、悲劇は増幅していると見ていいでしょう。

波部

行ったところ、どこからともなく数十人の人民武装警察部隊の隊伍が人民大会堂の南のほうから出てくる。また別の方から数百人の部隊が整然と隊列を組んで出てきて、やがて革命博物館の裏に消えていくといった具合で、こんな厳重な警備体制が敷かれているのですから、少なくとも北京では今すぐ民主化運動が再発する余地はないといえますね。

中国は広大な領土をもつ国なのですが、北京以外の都市ではどうなんでしょうか。

中嶋

上海とか他の地方都市へ行きますと、北京とはまた違った雰囲気があって、天安門事件に何か我関せずみたいなかたちで、社会が動いているようですね。

こうした状況を目の当たりにしますと、去年あそこまで、百万規模でデモが盛り上がったこと自体不思議なくらいなのですが、それはまた逆にそこまで爆発せざるを得ない不満や要求があったということになるわけですね。そして、今も問題は何か解決されてはおりません。

ですから、民主化の灯は消えてはおらず、地下で広がっているのですが、それが今すぐ爆発して、再びあの六月四日のような状況になるのかどうかということ、ここで見通すということとは非常に困難かと思っています。

波部

なるほど、民主化運動の灯は消えていないが、それがどこまで本当に実現できるかということになると、樂觀できないということですね。

中嶋

ただ、全般的にみてみますと、天安門事件が起こり、それが悲劇的な結末になって、それに対する抗議運動を通じて、台湾の人も、香港やシンガポールの人も、あるいは東京にいる

いわゆる華僑の人も、ニューヨークのチャイナタウンやパリにいる中国人も含めて、全世界的に中国人とは何かという新しい中国人像というか、中国をどういうふうにして作りかえていくべきかということを真剣に模索しようとする意識、それには従来の中国人意識を乗り越えなければならぬという新しいアイデンティティを求めようとする意識が出てきはじめたことは事実です。これは、長い間の中国の歴史にとって、はじめてのことだと思います。

中華思想と自己中心主義と事大主義を克服しない限り、民主化運動もダメじゃないかという意識、こうした意識がようやく芽生えてきたことは事実です。これは、高く評価していると思いますね。

波部

一方、中国の内政をみてみますと、徹底的な締め付けというか、恐怖政治が続いているわけですが、こうした状況はいつまで続いていくのでしょうか。

中嶋

天安門事件以後の中国の政治状況は、一口に言いますと、単に党内の危機とか、内政的な問題としてではなく、まさに共産党権力そのもの、中華人民共和国そのものが解体するかもしれないという危機をはらんでいます。天安門

事件の一つの代償として進んだ東欧、ソ連、モンゴルなどの民主化の波が、今度は逆に中国に押し寄せてくるのでは、という深刻な不安を中国の最高指導部は持ち続けていることでしょう。

ですから、あらゆるところで言論の自由を抑圧し、大学のなかにも人民解放軍総政治部のスタッフが入り込み、徹底した政治教育をしています。北京大学の学生が軍服を着てキャンパスに戻ってくる。一年間、兵営に連れていかれて教育されたわけですから……。

波部

そうしますと、あの事件以後の中国共産党の土台はかなり揺らいでいるとみていいわけですね。

中嶋

そうですね。権力の正統性ということからみますと、実は中国共産党の権力は、正統性の根拠をすでに失っていると思います。

中国へ行つて、知識人や学生と話をしてみますと、今でも中国共産党はきちんとしているとか、共産党は正しいとか、そんなことを言う人は全然いませんね。一般の人たちでさえ、われわれ外国人に、あからさまに共産党はもうダメだ、共産党が続く限りこの国は絶望だ、と言います。日本には今、中国からの留学生が大勢いますが、彼らの

ほとんどが党に絶望しています。だからこそ、民主化運動が起こったのです。

ところが、党の中枢部はそうではない。鄧小平を中心とするあの老人たちは、いわば革命第一世代なんです。「八老治国」——八人の老人が国を治めるといふ言葉にあるように、革命第一世代が持っているある種の使命感、それによって支えられている権力欲というか、権力基盤といったもの、これは東欧の場合と大きく違うと思うんです。あるいはソ連とも違うんじゃないでしょうか。

波部

党指導部は危機感を持ちながらも、現状を維持しようとしてもがいている……。

中嶋

そうですね。彼らは国民から信頼されているということじゃなくて、まさに自分たちが抗日戦争をやり、国共内戦を戦い、そして革命をやった。自分たちが国を作り上げたという意識がすごくあるわけです。

鄧小平にしても、俺がこの国をここまで支えてきた、文化大革命を否定し、毛沢東を批判してきた、まできたんだ。俺に背く奴は、民主でも何でもないんだ、そんな奴は即反乱分子であり、暴徒であるという、いわば民主主義の逆転した論理に取りつかれているわけなんです。

波部

たしか鄧小平は八十五歳と聞いています
が、権力の継承がうまくいくかどうか、
目が離せませんね。

中嶋

そうなんです。大胆な予測をすれば、香
港が中国に返還される一九九七年、あと
六年ちよつとですが、中国の現体制が崩壊するの
とどちらが早いことになりましようか。
鄧小平以後への権力継承がうまくいかないと

人口増、流民の暴動等が経済破綻につながる

波部

社会主義の総本山であるソ連や東欧の民
主化の流れを見えますと、政治的な体
制が行き詰まったというよりも、それ以前に経済
的な破綻をどうすることも出来なくなり、体制と
しての社会主義が崩壊したと思われるのですが、
中国の経済の実情はどうなのでしょう。

中嶋

今のようない政策を続けていきますと、経
済がもたないでしょう。
ソ連や北朝鮮に比べれば少々モノが豊富ではあ
りますが、決して豊かとはいえませんが。北京と
か上海といった大都市はまあまあかと思いますが、
地方の生活は一向に改善されません。それから、

には、民主化運動は再燃せざるを得ないでしょう
し、ソ連、東欧の民主化の影響も大変なものです。

また、台湾とか香港とかNIES諸国といった南か
らの水平的な影響も、共産中国をどんどんと洗い流
してきますね。イデオロギーではなく、モノによっ
て、経済の活力によって……。その圧力に、果たし
て中国は耐えられるか。数年後には、大きな変化が
起こる可能性が十分にあると、私はみています。

最近では経済を引きしめ過ぎて、購買力が低下、モ
ノがあってもモノが動かないという状態が続いて
おり、周辺諸国が豊かなだけに、その格差の大き
さに悩んでいるというのが実情でしょう。

波部

確か一九五〇年代の終わりから六〇年代
のはじめにかけて、一二〇〇万人位が餓
死したと言われていますが、これは農業政策の失
敗によるものなのでしょうか。

中嶋

農業政策の失敗もありますが、それにも
まして人口増が非常に深刻な問題として
挙げられます。中国では、毎年一五〇〇〜一六〇〇
万人が増えています。

華国鋒時代から「一人っ子政策」がとられており、
本来なら人口はゼロ成長であるはずなのですが、逆
に人口が増えていく。両親がいて、子供が一人だっ
たら、だんだんと人口は減っていくはずですが、こ
れが増えていくのですから、おかしい話です。しか
も、政府は「一人っ子政策」に違反した場合は処罰
をする、課税をするといっているのですから……。

そしてこの間、中国の国家統計局が十一億を越
えた、と発表しましたが、私は十二億を越えて十
三億になろうとしていると見ています。あのよう
に大きな大陸ですから、人口調査の仕方にもいろ
いろと問題があるようで、このあいだもある省で、
百万人もの戸籍にない人口が見つかったという
大騒ぎをしていましたが、とにかく異常な人口増
がすすんでいることは事実です。

波部

しかし、十三億に近い人間が満足に食べ
られないというのは、いかに政治的に
しつかりした枠組みを再構築しようとしても、国
自体が足元から崩れていきかねませんね。

中嶋

おっしゃるとおりで、現に中国の人口の
約八割が農民でありながら、食糧が自給
出来ず、外国から輸入しています。十一、二人を
食わすのに八人が働いても間に合わない。こんな

馬鹿な話はないわけで、中国の農業の生産性がい
かに低いかということを実証しています。

四億トンという食糧生産のメルクマール(指標)
があるのですが、それが実現されないまま、加え
て人口増加がすすむわけですから、事態はますま
す深刻になっていくことでしょう。

そこへもってきて、最近の深刻な社会問題は、
人民公社を解体して個人農にしたことです。当初
は農民それぞれにインセンティブ(刺激)を与え、
万元戸(年収入が一万円を超える農家)なども出
現し、農業生産も上昇したのですが、ここに至り
これも行き詰まってしまいました。

人民公社の場合は集団で生産をしていましたか
ら、働き手がなくなっても、周りの農民が手助け
して相互扶助することが出来ましたが、個人農だ
と働き手が高齢化などして働けなくなると、その
土地を耕す人がいなくなってしまう。その上、
一人っ子政策が基本ですから、娘一人の農家だと、
その子が町の工場に働きに出してしまうと、この土
地も働き手を失ってしまいます。

波部

人口増加にあえぎ、人口の八割が農民で
ありながら、働き手が無くなっていくと
いうのは、困った話ですね。

中嶋

数年前に土地管理法というのが出来て、働き手が無くなった農家の土地を万元戸が買い占めてもよくなりました。そうしますと、万元戸はますます太って大規模経営が可能になりましたが、一方では、非常に零細な農家も急増しました。農業経営の格差が極端なまでに拡大したわけです。

そうしますと、零細農家は生活が成り立たないから、彼らは自分の土地を離れて都市やその周辺に押し寄せてきました。流民、盲流と呼ばれる潜在失業者の大半は、このような事情から土地を離れた零細農民で占めています。

今、中国には八千万人の流民がいると言われていますが、私の予測では一億はいると見ています。彼らが都市に集まり、少しでも収入のよいところを求めてウロウロとほつき歩くものですから、鉄道の混乱は大変なものです。

波部

そうしますと、学生の民主化運動の再燃も気になるところですが、流民の暴動もまた目を離せません。

中嶋

彼らは潜在的な欲求不満分子ですから、どこかにちよつとでも火がつけば、ワーツと燃え上がる可能性は十分に秘めていると見な

ければなりません。

それから農業問題でもうひとつ補足しますと、農村近代化政策の目玉として工業化の足腰をつくるということで、中小企業の一番底辺にある、例えば鍛冶屋さんといった小規模経営の発展に力を入れたことがありました。これも一時は注目されましたが、やはりうまくいかなかったようです。

結局は、計画経済、市場原理が中途半端にしか貫徹しない中国では、一部のところに特権や利益が集中してしまつて、非常に歪んだ形になってしまひ、バタバタと倒産してしまいました。

波部

いずれにしても、中国の内政は非常に厳しいということになるかと思いますが、対外的な関係はどのようになっていきますか。

中嶋

まずソ連は自国のことが手一杯で、ここしばらく特別な働きかけは出来ないでしょうね。

アメリカの場合は、ブッシュ政権そのものは友好的な関係をとろうとしており、ブッシュ自身が中国へ出掛けて行くこともあるでしょうが、議会や世論は、天安門事件以後非常に厳しい姿勢で臨んでいますね。

それから、サウジアラビアが国交を回復しまし

たが、これはサウジが特別に外交的にポリシーがあるということではなくて、アラブ全体が中国を承認しているからということでしょう。ただ中東諸国への中国からの武器輸出という問題が底流にあって、中国は外貨獲得のために「死の商人」になっているのが現状です。こうした状況の中で、台湾がオフィシャルに中国を代表しているという

わけにはいかないから、中国との国交樹立は今後も続くことでしょう。今年のうちにインドネシア、シンガポールもそういう状況になるかもしれません。いずれにしても中国は、内政的には既定方針を貫きながら、対外的には何とかいいイメージをつくつていこうと、いわば外堀を少しずつ埋めていくような政策をとっていくものと思われますね。

生活の実態が見えない不思議な国・北朝鮮

波部

ところで、ここで同じ社会主義国である北朝鮮の様子を伺いたいと思います。たて前としての北朝鮮の姿は時々報道されますが、生活に根差した実態が見えませんか。そういう中で今年の四月下旬に訪朝されましたが、印象はどうでしたか。

中嶋

これまでに、ほとんどの社会主義国を見て回ったのですが、北朝鮮は実像をとらえるのが非常に難しい国だというのが第一の印象ですね。現地を歩いてても、その生活実態が見えてこないのです。非常に不思議な国です。

結局、管理された旅行のために、二週間いてもスケジュールは忙しいが、あまりよく見えない。

社会党などが訪朝団といつて訪ねていますが、おそらく状況は同じでしょう。食料を売っている所も見聞出来なかったし、デパートに行っても食料は売っていないかった。

しかし、そうかといって、町を歩いている人達が飢えている様子かというところ、平壤を見るかぎりそういう状況では全くありません。餓死者が出たという情報もありましたが、それは間違いでしょう。人びとの表情を見れば分かります。生活はかなり厳しいかもしれないが、餓死者が出るような状況ではないはずで

す。いずれにせよ、いわば自己完結した閉鎖的な国家という感を強くしましたね。



北朝鮮・平壤(ピョンヤン)市内。建物は立派だが、街を歩いても、生活の実態が見えてこない。

波部

聞くところによると、生活は決して豊かではないのに、ピョンヤンの建物などは、釣り合いなほど大きいものがあるようですが……。

中嶋

都市は大変大きくて、建物も立派なものです。金日成主席を称える大きなモニュメントなどが方々に建っていて、非生産的な投資が多いな、という印象を受けました。

彼らの信条はマルクス主義ではなくて、儒教的権威主義と言えるもので、戦時中の日本によく似た家父長制度というものがしっかりと根付いています。国民は道徳的で礼儀正しいから、中国のよう

に乱れたところがありませんね。
金日成主席が掲げる主体(チュチェ)思想も国全体にゆきわたっているようです。これは、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の三つの路線からなり、金主席の創始した党の唯一思想とされ、全国民の信奉と服従が義務づけられているようです。

波部

例えば大韓航空機の爆破事件など、われわれがみて「あんなひどいことをやって」と思うようなことでも、そうした思想によって正当化されるのですね。

ところで、金日成主席は高齢で健康状態も必ず

しもよいようではなさそうですし、国際的にも北朝鮮は孤立した状態なのですが、果たしてこのままの形でやっていけるのでしょうか。

中嶋

金日成が生きているうちは今のままでやっていくでしょうが、その先はどうなるか、全く分かりません。

私は、二つの選択の可能性があると思っています。一つは、政治体制や経済が行き詰まって、パンニックを起こす。北朝鮮のルーマニア化です。ただ、彼らはルーマニアや中国やソ連の混乱について、よく研究しているようです。自分たちの国は閉鎖国家だけれど、一步一步考えながらやっていく。どうすればソフトランディングをして、次の世代に移していけるか、ルーマニアの二の舞いを踏まないためにはどうすればよいかと、真剣に考えているようです。彼らの教育水準は高いですから……。

そしてもう一つの可能性は、ちよつと意外に思われるでしょうが、北朝鮮の台湾化です。台湾も蒋介石時代は大変な独裁で、今の自由な台湾とは全く違って、徹底した反共でしたね。

息子の蔣経国に権力を譲ったこと、人口が二千万前後であること、儒教国家であること、国際的

に孤立していたことなど、いくつかの共通項が上げられますね。思想的には、全く対局にありますね……。

波部

となると北朝鮮の場合、息子の金正日がどのくらいの器の人物かということでしょうね。

中嶋

そうですね。蒋介石の息子の蔣経国は大変立派な器でしたが、当初は軍や警察をバックに出てきたということで、非常に暗いイメージがありました。しかし、晩年はそのイメージを払拭し、フレキシブルでソフトな政策をやり、台湾の民主化の先鞭をつけましたね。

波部

現在の台湾は自由経済体制で非常な発展をしているわけですが、北朝鮮は社会主義体制でやっていけるのでしょうか。

中嶋

いや、北朝鮮も社会主義では駄目だといっていますよ。先ほど挙げたチュチェ思想でやっていこうとしています。

波部

このところ、韓国側が板門店の自由往来を提案するなどいろん

な揺さぶりをかけているようですが……。

中嶋

このほど、韓国はゴルバチョフとあのように派手な外交をやりましたが、国内は逆にガタガタしていますね。経済がよくない上に、反米運動が起こったり、大企業でのストライキといった具合に、なかなかうまくいかないようです。いずれにしても、朝鮮半島情勢が安定し、さまざまな懸案が解決するためには、少なくともここ

十年位はかかるのではないのでしょうか。

波部

このように激動する国際情勢を前にして、日本の外交姿勢が何かと問われるわけですが、その一つに对中国への第三次円借款八千億円が取り沙汰されています。西側諸国は一様に、もっと慎重に対処せよという態度を取りましたが、なぜ日本はあのように積極的はこの問題に当たったのでしょうか。

中国は本当に外交を重視しているのか、

中嶋

日本側はいつも、なんとなく日中友好とか、隣国だからとか、古い付き合いだからといった、いわば情緒的な感情でもって外交をすすめるから、西側諸国に理解されにくいのです。天安門事件に対して西側諸国は、人権、民主主義、人類の普遍的な原理といった立場から捉えようとしますが、日本はこうした点が非常にいいですね。だから理解されない。

今回のヒューストン・サミットでも、日本の顔を立てたにすぎないのであって、内心では、日本は何を考えているのか、という疑問を抱いているはずです。

波部

日本側の積極的な働きかけの裏には、かつて中国が賠償金を放棄したといった歴史的な理由もあるのですが、ここまでやらないといけないのかという疑問が残りますね。

中嶋

中国が困っているから善意で援助してあげる、といったきれいな言葉でカモフラージュされていますが、経済援助というのは非常に複雑な、現代の怪物ではないかと思うんです。まず第一に考えられることは、円借款自身は非常に政治的なイシュー(争点)になっていて、中国側にしますと、円借款を取り付けることが国内での政治的な立場を強化することになるわけです。

江沢民総書記などは特にそれを望んでいます。

一方、日本側としても、単に援助をするというだけではなく、将来の日中関係の太いパイプになるようにという思惑があるわけです。自民党の派閥の領袖が、このところ相次いで中国へ行っていますが、それも今あげたような思惑があるからでしょう。

波部

本来ならば、お金を借りる側がこちらに来るべきなのに、貸す側がわざわざ向こうに出掛けて行く。どうも不自然に思えるのです。が……。

中嶋

ご指摘のとおりで、李鵬なり江沢民なりが日本にやって来て、「天安門事件で、日本の皆さんに大変ご心配をかけました」と言うべきだと思いますが、彼らはやって来ませんね。従来から私はこれを「対中国位負け外交」と言ってきたのですが、中国問題に関する限り、何か問題が起これると、常に日本が下手に出るというパターンを作ってきましたね。教科書問題もそうでしたし、靖国問題も同様です。これが第二の問題点です。

第三は、円借款というのはODA(政府開発援助)の一環で、これにいろいろと問題があるよう

に、円借款にも利権がらみという問題がある。円借款、ODAを巡る族議員がいるんですよ。

今の中国は、円借款に頼らないとやっていけない状態で、貿易をしようにも手持ちの外貨がないわけです。また、日本の銀行も一部融資を始めましたが、他方では焦げ付きが出てしまい、すでに百億前後の対外累積債務を返済していかなければならない状態ですから、通常の取引は期待できない。

そこで、円借款に頼るわけですから、実際には一種の紐付きになってしまふのです。今は国民もマスコミもあまり気付いていないようですが、円借款を巡るさまざまな影が現実に出てきていますね。

第四は、円借款にはいろいろな条件をつけなければいけないのですが、中国が果たしてそうした条件に応ずることが出来るかということです。うまくいかない場合には、政治的に傷が付くことになりかねないので、責任のなすり付け合いをする事になってしまひます。

波部

そうした視点で捉えようと、この種の外交問題を軽々に扱ってはならないということとですね。

中嶋

それから、第三次円借款八千億円は九〇年から五年間、毎年協力することにな

るのですが、実は第二次円借款も使い切れしていないんですよ。中国側に、ああした政情不安や使い得る条件が整っていないために、六割くらいしか使っていません。

そうした問題があるのに、またその上に上積みするというのはおかしいという見方も出てきます。ただ、上積みをして枠を作っておかないと、将来使えないということも考えられましょう。

問題は、ここで一番大事なことは、それにもかかわらず中国からすればこの円借款というのは、非常に有利な借款だということです。第三次の場合、確か利子が二・五パーセントくらいで非常に低利ですし、その上、長期の延べ払いですから、こんなに有利な借款はないですよ。他の外国から借りると、金利も高いし、条件も厳しい。供与ですから、ただのようなものです。

波部

第二次の借款もまだ使いきっていないとのことですが、使い方についての日本側の条件はつけないのでしょうか。

中嶋

日本側が一切の条件をつけずに対処しているところに問題があると思います。

それから、八千百億円を五年で割ってみますと、年間十二億ドル前後なんです。あれだけ人口が

多く領土の広い中国に対して、年間に十二億ドルくらい供与しても、それこそ千天の慈雨になるのか、どうか……。

それよりも、例えば留学生が日本に自由にこれるようにする。留学の機会をきちんと与えて、帰国してからの職業も確保してあげる。このように、将来に希望を持たせるようなお手伝いをする方法があるはずなのです。

今、中国は公害問題が非常に深刻で、特に酸性雨の問題は、一日たりと放置出来ないような状態です。で、こうした地球規模での環境問題に借款を使えば、中国のためにも、そして日本のためにもなると思います。

そうした条件をつけることが、より有効な使い方になるのであって、中国が孤立しているから、なし崩し的に日本が助っ人になろうなんて発想は、それこそ姑息な外交というほかありません。

波部

派閥のためとか、自分のための外交ではなく、もっと一貫性のある、哲学のある外交を展開してほしいものです。

長時間にわたって、貴重なお話しをして頂きまして、本当にありがとうございました。

(平成二年八月十八日、収録)



「筋」を読み、事実を集める

「風が吹けば桶屋が儲かる」という表現はあまりいい意味には使われない。だが、取材を行い、記事をまとめるためには不

可欠の発想といえる。もちろん、想像力による辻褄合わせで記事を書いてはならないが、辻褄合わせができるほどの想像力がなければ記事が書けないのも事実。

何から何まで取材できれば言うことなしだが、通常は無理だ。従って、断片的な事実を入手して、それを繋ぎ合わせた、重ね合わせたしなから「筋」を読み取っていく。さらに、それが妥当であることを証明する事実を集めていくという作業がジャーナリストの仕事になる。それにジグソーパズルを解きながら、絵を浮かび上がらせていくようなおもしろさを感じ始めてしまったら、もうこの稼業はやめられない。

さて、フィリピン・ネグロス島のバコロド市近郊で、日本の民間海外援助団体「オイスカ」から派遣されていた農業技術指導員が共産ゲリラ、新人民軍（NPA）に誘拐され、八月二日に六十五日ぶりで解放されるという事件があった。新聞報道などで大きく報じられた水野文雄さん（三六歳）誘拐事件だ。

NPAは外国からの援助をアキノ政権で入れ策と批判している。とりわけ、水野さんが指導する養蚕プロジェクトを進めている地元的地域経済開発組合を名指しして、「アキノ政権の共産ゲリラ支

持基盤崩壊のための装置」と決め付けていた。オイスカやこの組合に対して警告文書を送りつけたり、組合の車に放火するなどの事件も起きていた。

しかも舞台となったのが、「アキノ政権の共産ゲリラ対策の実験室」といわれるネグロス島だ。NPAもここでは「あらゆる手段でゲリラ戦を展開する」と宣言していた。こうした事実から、事件は無防備な日本人誘拐をめぐって、この組織を潰すという政治的狙いによるものと考えられた。

また、事件後に米国の平和部隊は「隊員は危険にさらされている」としてフィリピンから撤収している。でも、政治的犯行との見方を裏付けていた。

ところが、想像力を必要とする事態が起きた。NPAはオイスカに対して多額の身代金を要求したのだ。さらに、解放された水野さんが語ったところによると、この身代金要求はNPA上部機関からの指令で、早い段階で撤回されたという。

水野事件、三つの仮説

政治的犯行の可能性が強いと思われるのに、なぜ身代金を要求したのか。また、要求が撤回されたというのはいったいど

明るく正しい教育をすすめる会機関誌

むとうむへん

平成2年
秋季号
NO. 51



特集

迷走を続ける
中国・北朝鮮の行方は……

東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄氏に聞く

